

特定非営利活動法人

平成 23 年夏号 NO, 45



http://nepai-mika.jp mika@ssr.co.jp

ネパール・ミカの会

平成23年7月31日発行194-0035東京都町田市忠生2-5-36 tel042-791-0602



「さあ、どう動くか」

NPO 法人ネパール・ミカの会理事長 齋藤 謹也

本年、年頭から半年を過ぎてしまいました。皆様いかがお過ご しですか。

さて、『3.11』を境に日本は大きな難局にぶつかってしまい、「何かしなければ」「でも何をどうすればよいのかわからない」との会話が今も続いています。東日本の大地震、大津波に加えて原発事故と続き、政権も末期状況に陥り、混乱が続いています。何をすればという悩みはますます深刻になっているように思われます。そして、放射能問題は身近なものであり、どうなるか心配は続きます。

ところで、4月下旬、第14次ネパール教育支援の旅にも行きましたが、ルンビニの子供たちや教員の方々から、「私達の支援はあとにして、当面は日本の子供たちのための支援活動をしていただいて、その後、また私たちの事も忘れないで会いに来てください」との言葉をもらったところです。援助は順調に行われていますが、皆様の協力のおかげであり、ラマ理事の尽力のおかげであることを実感しています。

震災直後から何便かの支援物資を送ったり、又、東日本出身の ミカの会々員の関係校4校ほどに、教育支援費として直接義援金 を贈ったりしていますが、尚、今後活動をどうすればの思いが割 り切れぬまま、続いているのは、私ばかりではないでしょう。

私自身も一行5名と6月下旬、陸前高田市に6か所程の支援をさせていただきましたが、事故後4か月経っても、津波により流失した街並みのすさまじい状況は変わらず、実際目にすること、そして考えること、少しでも実践することの大切さを改めて思ったところです。加齢、高齢を理由にしないで、もうひとつ体力に応じた働きをしなければという思いが強まっています。

創立 15 周年を迎える 2011 年度、どう動くかを真剣に考えながら、共に助け合い、支えあう重要さを少しでも実行したいと思っています。手から手へ、心と心を結びつけあいましょう。

夏真っ盛りのこの時期、健康第一に過ごしながら、頑張っていきたいと思います。



平成23年度定期総会を終えて

副理事長 大谷 安宏



5月21日、平成23年度定期総会が町田市民ホールにて開催された。

毎年総会に出席し現地報告や会員と親しく触れ合うヌルブ・ラマ理事の招聘は東日本大震災、福島第一原発事故の影響により取りやめた。また、ガネッシュ・ヨンザン・タマンネパール大使も原発事故の影響で大阪領事館に移られ出席を頂けずに例年と異なる総会となった。

齋藤理事長から第14次教育支援の旅にてビバルハワ小中校3教室落成式の状況、東日本大災害に対し現地各所の人々からの見舞いと早期の復興を願うと共にこの様な状況の時に支援を受けることは申し訳ないと伝えられたとの報告と共に、創立15周年を向かえるにあたり引き続き関係各位の協力をお願いされた。

審議事項平成22年事業報告、決算報告、監査報告。平成23年度事業計画案、収支予算案は全員異議なく原案通り可決され、今年度支援事業としてシッダルタ募金によるシッダルタ校第二期工事、穂坂資金によるティナウ校図書館建設、各支援団体助成による図書支援、制服支援、15周年記念行事の検討立案などが承認された。

役員任期満了に伴い永年会計に尽力された青沼副理事長、榎本総務担当理事、齋藤広報担当理事が退任され、2年ぶりに復帰された加藤広報担当理事新たに松瀬企画担当理事、 榎本監事の就任が満場一致をもって承認され、新たな体制での活動が期待される。

総会終了後、恒例の懇親会は来賓の日・ネ協会小嶋会長、国際 ソロプチミスト町田 - さつき山口会長などを交えて和やかに行 われた。

創立 15 周年の節目を迎え、これからの会の進むべき方向を明確にすることが肝要と思われる。支援のあり方、支援資金の調達、運営体制、現地体制など少なくも三年先の目標を見据えての年度計画を展開してゆく運営になればと思っている。

本来、3月22日シンガポール経由で行く旅の予定であったが、東日本大震災があったため、一か月遅れの4月18日の出発と変わった。参加人数も9人から4人。飛行機もキャセイパシフィック航空で香港経由となった。初めての航空会社だったので多少の不安はあったが、香港からのドラゴン航空も乗り心地や食事は満足できた。

4月18日羽田 AM 10:30 出発 香港 14:25 到着

香港 PM 18:05 出発 カトマンズ 22:15 到着 ヌルブ・ラマさんと会いバイシャリホテルに着く。朝、日本を出発して当日に着くのは結構良いと感じた。

4月19日ホテルを7時半に出て飛行場へ。途中の町中で若い人々が行列をしていた。ラマさんに聞いたらビザをとるためと言う。皆、出稼ぎの為らしい。それもアフガニスタンに行く人が多いらしい。危ないとこなのにと言うとネパールにいても仕事がないし、外国に行って働いた方が良いとの事。絶対に死ぬと決まっているのではないのだからと言う。家族の為に行くらしい。考えさせられる。8時40分発のバイラワ便に乗る。

9時45分シリ・シッタルダ校へ理事、先生、村人が迎えてくれた。日本が震災の大変な時に来てくれたのには、喜んでくれた。3年計画の1年目である三教室分の基礎工事が予定通り出来上がっていた。高校も欲しいようだ。敷地に役場、郵便局、保健センターがあるが、子供たちが並んでいたので聞くと、マイクロソフトの援助で回虫の駆除の薬を飲んでいました。

10時25分昨年穂坂さん資金で出来上がったティナウ小学校。今回は図書館を造る場所を視察。

校舎の工事が途中までで終わっている所が良いと思ったが、村で造るので、前の畑の場所に造って欲しいと頼まれた。 バイラワの町に戻り、昼食。その後、明日落成式予定のシリ・ ビバルハワ小・中校のプレゼントの時計を買い求めた。



今日はルンビニ公園のお祭りなので、寄り道をすることになったが、通称町田街道がトラックの渋滞で動かない。セメント工場に入るために、待っているようだ。

ルンビニ公園の入り口から出店が沢山でている。暑いので温度計を見ると 39 度 C。

今日の宿泊はルンビニ笠井ホテル。部屋は広いし、食事も美味しい。食後は明日の準備。

四つ葉会より頂いた布袋にノート、鉛筆を583セット。

4月20日朝のルンビニ公園へお参り。菩提樹の所で般若心経を唱える。

ホテルに戻り、荷物を積みシリ・ビバルハワ小・中校へ。まだ、新学期が始まっていないので、生徒数は少ないが、理事、先生、村人たちが迎えてくれた。テントの中に入り、挨拶後、ひろしま祈りの石財団の助成による三教室のテープカット。

子供たちには布袋をプレゼント。津波で大変な時なのに感謝された。これからも来てほしいと言われた。



12時スンディ校に寄ってみる。布袋を渡した。大石さんの寄付の校舎が傷んでいる。10万~15万位の修繕費用がかかるらしい。ミカの会のお蔭で人数も300人になった。高校も造りたいので、支援をお願いしたいと言っていた。

12 時半からシリ・アジアリ校に本を寄贈するために訪問。 学校の前に池を少し、潰し道を動かし学校の敷地を作るらしい。

昼食はルンビニ公園近くのルンビニ・バンブウ・リゾート。

午後はマズワニ校へ。学校は休みなので先生 10 人に本を 寄贈。ミカの会員よりの日本の写真 新幹線、スカイツリー、 東京タワー、城、雪、七五三の写真など高校生に渡してもら えるよう説明しながら寄贈しました。

先生達は興味深々のようです。今年の高校試験は29人で女性が6割だそうです。ミカの会のお蔭で地域一番になり喜んでいました。

近くの寺子屋へ支援金額は少なく、年間9万ルピーです。



笠井ホテルで18時半から校長先生と夕食会。スンディ、マヤデビィ、ティナウ、グルアニマイ、ビバルハワ、ヤナトラハ、アマリ、ルンビニ、マヅワニ、アジアリ、シリシリラム、校長先生といろいろとラマさんの指示のもと働いてくれているラムネさんが集まった。

どの先生も震災の大変な時に来てくれて嬉しく、日本が落ち着いたらルンビニも忘れないでほしい、理事長の体の心配、大石トキさんの事などを話された。

ラムネさんの話はミカの会のおかげで子供たちが掃除の態度なども変わった気がすると言っていた。ずっと、見てきて感じたようだ。本当に嬉しい。テニスボールをプレゼントを用意したが、バスで来た先生は少し早めに帰ったため、渡しそびれた。ゴメンナサイ。

4月21日9時半今日はタンセンに向けホテル出発。スンディ校にテニスボールを渡す。

9時45分ヤナトラハ校で本を寄贈。学校に来ていた子供たちに鉛筆をプレゼント。

10 時 15 分 グルアニマイ校の図書館で本を寄贈。2 年生、3 年生に布袋をプレゼント。子供たちと歌を歌い交流。

ティナウ校に寄りテニスボールを渡し、タンセンに向かいました。途中、ブトワルのナグロレストランで昼食。新婚ホヤホヤの塩屋の娘でラザと婿さんも一緒でした。

タンセンに向かう途中の山々の木々は萌木色に染まりとても 綺麗でした。ネパールで初めて綺麗な緑を見たのはうれしかっ た。街道でバナナ、ウリ、パパイヤを食べながら、4時間半で タンセンに着きました。

4月22日 泊まったロッジでは食事がつかないので、シリナガルホテルの屋上で戴きました。今日は本のプレゼント日。ミレニアム校、トリバン大学文系と理系、モホン女子校、セン校10+2校を予定、シリナガル校、JVT校等。

ルンビ二地区、タンセン地区に贈られた図書の見開きにはひ ろしま祈の石財団寄贈のゴム印が押されていた。

モホン女子校では、西沢さんが日本の地図を書き日本の事など説明したり、学生たちの卒業後の希望を聞いたりしました。

学生皆さん真面目に勉強しています。今のネパールでは希望 に叶う職業に就くのは難しいでしょう。

夕食会はタンセンにただ一つのナグロレストランで校長先生 を招き、行われました。やはり、日本の事、理事長、大石さん の事が話題になり楽しい一時を過ごしました。

4月23日8時今日はポカラに向け、ホテルを出発。タンセンの古いお寺に寄ったところとても気持ちの良い音楽を奏でていました。時間があれば、もっと居たかった場所です。

ポカラには 13 時には到着。宿泊はベース・キャンプ・リゾートホテル。隣のたべもの屋で日本食。買い物をしながらホテルに戻り、休憩後 私、吉田さん、ラマさんは山岳博物館を楽しみました。

4月24日は早朝サランコットへ。残念ながらこの日も山は見えません。ただ、朝日は拝めました。朝食後ペア湖でのんびりボートに乗ったのですが、やはり、ヒマラヤの山は雲の中でした。初めての方には白い山を見てもらいたかったですね。昼ごろ、飛行場に行ったのですが、カトマンズの飛行場が混んでいるため、飛行機は待てど暮らせど来ません。

1時間半くらい遅れて、やっと、搭乗することが出来ました。

4月25日今日は帰国日。午前はパタン観光。昼頃、カドマカニア女子校訪問。制服がスカートタイプからパンツスタイルに変わっていました。ホテルに戻り、最後の民芸品の買い物。色々の物の物価が上がり、何軒も店を回っても欲しいものがありません。大変疲れました。23:15分発の香港行きのドラゴン航空の便に乗り、何とか帰国しました。人数が少ない分、大変な部分はありましたが、纏まりのあるとても良い旅を味わうことが出来ました。ありがとう・・・



第14次ネパール教育支援の旅

吉田 久子

この度は参加させて頂きまして、ありがとうございました。 香港経由の旅でしたが、カトマンドゥ空港に到着した時は ホット胸を撫で下ろしました。出迎えて下さったラマ理事さ んと闇の中をホテルに向かいましたが、街燈は無く、街の様 子をのほとんど見ることは出来ませんでした。

翌朝、飛行機でバイラワ経由にてルンビニに入り、学校見学を開始しました。両手で合掌し「ナマステ」の挨拶から始まるネパールの交流は、とても親しみがあり、大人も子供もすぐに目で頷き合えるようでした。

ビバルハワ中学校落成贈呈式は、鮮やかなテントの中で大勢の子供達や村人の参加の中で行われました。

三つの教室の入り口でテープカットがあり、鍵を外しドアを開けました。拍手の中、参加者の気持ちが伝わってきました。代表の方の挨拶をお聴きし、樹木の下で学んでいた子供達が屋根の下で学べることの大切さを知り、この地区で一人でも多くの子供達が通学してくれる事を祈らずにはいられませんでした。

丁度、この地では小麦の刈り取りが行われていました。私が 子供の頃、相模原市で見た情景に似て懐かしさを覚えました。計画通り、各学校を訪問し、図書の寄贈が行われましたが、各学校の要望に応えての専門書が多く、調達したラマ理事さんのご苦労が大変だったろうと思いました。

ルンビニニ日目の夜、カサイホテルで各学校の校長先生方との懇親会が開催されました。皆さんは、心から東日本大震 災へのお見舞いと日頃の支援への感謝の気持ちを話されておりました。

また、タンセンでの学校関係者との夕食懇親会でも同じような励ましの言葉を聞きました。現在、どの学校も ten プラス two を目指していて、在学年数を 12 年として大学受験に向けて努力しているそうです。

タンセンは山間の村であり、子供達の通学がどんなに大変だろうかと思いました。

タンセンからポカラへの移動中、天空の郷を見ることが出来ました。その昔インカ帝国から始まったとされている山頂まで続く段々畑の美しさは心に焼き付いています。

厳しい環境の中で人が生きるために出された知恵でしょう。 いつまでも保存される事を願いながら保養地ポカラに到着し ました。湖のある美しい村でした。

昨年開館した博物館や早朝はるかにエベレスト山脈を見たり、ネパールのいろいろを知る事が出来ました。

世界遺産であるお釈迦様の生 誕地を訪問する事が出来、理事 長先生と一緒にお経を唱えたと きは心の中が洗われる思いでし た。

初めてのネパール訪問でしたが、たくさんの事が心に残りました。機会がありましたら又訪問したいと思っています。同行の皆様、大変お世話になりました。



タンセンのトイレで考えた

西澤 斉

今回の旅には会員となった私の父が行く予定であったのが、 先の地震で都合がつかなくなり、急遽代理で行くこととなった。 旅行代金はもちろん父持ちである。

いつものケチな節約旅の癖で、目の前にある物をとにかく平らげていたら、何が合わなかったのか、タンセンの街で腹を壊した。持参した薬や、吉田さんにいただいた 20 粒飲むという銀色の薬を飲んだけれども、効かなかった。一晩中トイレに籠もることとなった。

現在、無職で親の脛をかじって暮らしている。食費も電気代も自分で払っているわけではないので、『買い占めはやめよう、節電につとめよう』などと声をあげても、何ら説得力はない。二十歳前ならいざ知らず、四十男なのである。誰かの援助の下で生きると、どうしても自分を狭めてしまうことになる。それが嫌なら自立せよ、ということであろう。

以前読んだ本に、最近欧州では、昔のように旬の物を食べようという声があるが、本来聖書の楽園とは常春で、旬を超えて食べ物に困らぬ所であり、その楽園を求めて我々は努力してきたのではなかったか、とあった。

そういう意味では、冷暖房完備の建物が林立し、コンビニなどで年中同じ食物が得られる東京都心部などはまさに楽園である。けれども、その楽園を首都に持つ国で毎年三万人以上の人が自ら命を絶っている。つまりはこういうことであろう。

『我々は確かに楽園にたどり着いた。けれどもたどり着いてみればそこは我々にとって決して住み心地のいい場所ではなかった』

タンセンは標高 1350m の山の斜面に開けた街である。子供達は学校に通うために谷の向こうの山の、さらにその向こう側から歩いて来るのだという。確か朝四時だかに家を出る子供もいるのだという。それは『通学』というよりは『毎日登山』に思える。そうまでしてなぜ人は学ぶのか、段々畑の連なる谷を見下ろして考えてしまう。

学生時代は地学を専攻していた。ある時、岩石学の教授が黒板に円を描き言った。

「私たちはここまで知ることが出来た。この先、この円を広げてゆくのはあなたたちである。若いうちはとにかく勉強をしなさい」と。教授は私が在学中に他界された。

『地震予知は本当に出来ぬのか』そのようなことも仰っていた。 学問は人の役に立ってこそ意味がある、そういうスタンスで あったと思う。

最近は独学で絵を描いて過ごしている。今回の旅でも幾つかスケッチをさせてもらった。タンセンの校長先生方と会食をした



皆、東日本の震災に胸を痛められていた。

隣に座られた先生も、しきりとそのことを言われた。気さくな方で、私のぶっ壊れ英語につき合ってくれ、腹痛を忘れて時を過ごした。長の尊大さがなく、穏やかで暖かな方々ばかりであった。

タンセン織のバッグとネクタイまでいただき、そもそもが『身 銭を切らずに海外旅行が出来る』という不純な動機での参加で あった私としては、忸怩たる思いであった。

中野さんからネパール語の会話帳を借りていたのに、ろくに 覚えず、礼の一つもきちんと言えなかったことが悔やまれる。 料理を平らげられなかったことも心残りである。

図書支援の本を学校に届けた際、図書室を訪れた。ガラス扉の棚(会で寄贈した物もあり)に収められていたり、背表紙を布で補強してあったりと、いずれも丁寧に読み継がれてきた本たちに違いない。

今回ラマさんが手配して届けた本も大切に読み継がれて行く に違いない。いや、あるいは何年か後には、電子書籍などが導 入されているのかもしれない。そうなった方が良いとは思うの だけれども、よく判らない。

井桁に組んだ木枠を、間に石を詰めて積み上げる構造の住宅をポカラ周辺で見た。柱はなく、地震に対抗するためであるという。風土にあったそれぞれの暮らし方がある。一色で塗りつぶされた絵はつまらない。



旅の途中で齋藤理事長も体調を崩された。それでも坦々と日程をこなされていた。

カンボジアで日本人ボランティアが掘った井戸の水に砒素が 混ざっていて、住民が被害を受けたというニュースを聞いたこ とがある。良かれと思ってしたことが悪しき結果を生むことも ある。だから、理事長がどこかで述べられていたように時が大 切なのだろうなと思う。

援助した相手と時を共にして行く覚悟のない者はボランティアをすべきではないのかも知れない。けれども、とくに現在の東日本の状況は猫の手も必要なほどであると思うので、この場合は一兵卒に徹し、相手の希望に添うことを淡々とこなすよりほかないのだろうかと思う。その範囲を超えると無責任なことになりはしまいかと悩んだりもする。

貧困で命を落とすのは悪であると思う。けれども、ではどうなることが良いことであるのか、判らずにいる。

カトマンズの女子校では心臓のバイパス手術を受けたという 理事長を心配して女学生達が取り囲んだ。日本で年頃の女の子 に好意的に囲まれるというのは、歌手かアイドル以外ありえな い。輪の外でカメラを構えてうらやましがりつつ、これも積み 重ねた時が作り出した光景といえるのであろうなと思った。

ポカラの宿に計画停電の時間割があった。毎日二回、七時間 ずつ停電するらしい。そういう生活をしている人々にしてみれ ば、我々の『エコ』などはお遊びに過ぎないだろう。

だから節電しても意味がないとか、ネパールと同じ生活をせよと言う気はない。良くも悪くも我々はここまで来てしまった。ここから始めていくより他はない。

門脇小学校への震災支援金受け渡し報告

青沼 義信



残された資源と土地をめぐって混迷を深めゆく世界で、70 億無駄にいるとは思いたくない。絡まった糸を解きほぐす答を、誰かが持っているのだと信じたい。それは、アフリカ・マラウイの少年かも知れないし、中米・コスタリカの少女かも知れない。ネパール・タンセンの女の子かも知れないし、日本・宮城の男の子かも知れない。もっと言えば、それはあなたかも知れないし、私かも知れない。『それは誰にも判らない』

そこがミソであると思う。そこに、私が生きて行く意味があるのではないか、無職人はそう自分に都合のいい風に思う。

誰かがその答を発したときに、それに耳を傾け、受け取れる 世界でありたいと思う。

いずれ誰かが答えを見つけだす、その未来を残しておきたいとも思う。そのための学びの支援であるかと理解する。 皆、幸せになりたいと生きている。

子供達で溢れるネパールの街は、斜陽国から来た旅行者の目に眩しい。いつかはこの子供達に助けて貰う時が来るのかも知れない。

公園のベンチに並んで座りながら無言でゲーム機をピコピコしている子供達より、坂道を輪っかを転がして駆けている子供達のほうがより生に近いところで生きていて楽しそうであると、旅行者にはそう見える。そう言うと、馬鹿言うなピコピコする方が楽しいに決まっている、俺達だって本当はピコピコしたいのだ、と言われてしまうのかも知れない。

隣の芝生はいつも青く見えるものである。

手にしなければ捨てることは出来ない。そんなインド聖者の 言葉も思い出す。

トイレの壁を見つめて、このような所ではくたばりたくないな、と少々大げさに思う。ではどのような所でならばくたばっても構わないのか。そのくたばってもいい場所を探して、まだもう少し生きていこうと思う。

様々な所で様々な人に世話になり、助けられてばかりいる。 恩返しも出来ず、義理も欠き、何だか巨額の借金を抱えている 気分である。そうなってしまう言い訳をしたいけれども紙面の 都合上やめる。

今回図らずも会の活動に参加させていただいた。僅かでも役に立てたのかどうか、心許ない。むしろまた借財が増えたなと感ずる。

停電中のタンセンの夜空は美しかった。どれが何の星座かなど判らぬほどの星が、恐いくらいに空一面に散らばり、輝いていた。

24時間で一回転する一顆(つぶ)の珠(たま)に我々は乗っかって、今日も右往左往している。

日本人四十歳、ネパールの子供に負けてはいられぬ。楽園はない。自立への道を常に模索して行かねばならない。這い上がって行かねばならない。

画家・中川一政、95歳の時の言葉である。「とにかく生きているうちは、生きねば」

下痢はラマさんが買ってきてくれた薬を飲んですぐによくなった。

6月10日から11日まで穂坂理事、青沼会員の2名で宮城県 石巻市へ支援金の受け渡しに行って来ました。

この支援金の届け先は、本来青沼会員が卒業した石巻市立石巻小学校か石巻中学校が該当するのですが、石巻中学校は山の手にあり被害はほとんど無く、石巻小学校に支援金を持参する積りで学校に連絡したのですが、石巻小学校鈴木則男校長から「石巻小学校は1階部分が浸水したものの大きな被害が無く現在片付けも終わり授業は滞りなく再開出来ています。

しかし隣の門脇学区の被害は非常に大きく、特に門脇小学校は津波により校舎は壊滅、校舎内に突っ込んだ自動車からの燃料漏れに引火したことで火災も発生し被害が非常に大きいので、できれば門脇小学校に支援してあげて頂きたい」と温かく隣を気遣う言葉を頂き、理事会に報告了承を得ましたので、卒業学校は違うのですが支援を石巻市立門脇小学校に変更させて頂きました。

6月10日東京駅から8時12分発の新幹線はやてで仙台へ、仙台からは、仙石線が松島から石巻までがまだ復旧していないため、石巻直行の急行バスで石巻に向かいました。

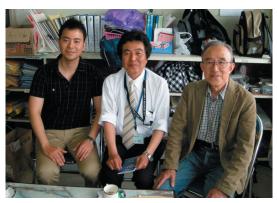
石巻着後、石巻小学校に立ち寄り校長先生に挨拶後、支援金の受け渡し先の門脇小学校(現在、門脇中学校に間借りし授業を行っています)に向かい、その途中で市内の被災状況や廃墟と化した門脇小学校の校舎を視察しましたが復興には相当の日時を要するのではないかと考えをめぐらせながら門脇小学校に向かい、支援金20万円を門脇小学校佐々木隆哉校長に受け取っていただきました。

校長先生は「この支援金は津波により教科書、学用品を流失してしまった生徒達の教材購入などに使わせて頂きたい」と、再三感謝の意を表していました。また、「学校の西側には標高60mほどの日和山公園がありほとんどの生徒が避難した為犠牲者を出さずに済んだことは、何にものにも代えがたいことでした」とのお話もされ生徒の無事を心から喜んでいましたが、「しかし校舎は二度と現在地に建設は出来ないと思うので、間借り授業が何時まで続くのか見通しも立たない状況である」と苦しい現状をも語ってもおられました。

その後日和山公園まで足を延ばし慰霊所で合掌の後、市の中心部や北上川河畔を歩き被害状況を視察しましたが、瓦礫や打ち上げられた漁船、家の中に突っ込んだ自動車、ひん曲がったシャッターなど3ヶ月経過でもまだ撤去修復が出来ず、復興の長期化を感じさせられる光景でした。

帰途に乗車した松島までのJR代替バスは海岸近くを走行するので東松島市の惨状を車窓から見ることができましたが、この地区も石巻同様瓦礫の撤去も進んでおらず暗澹たる気持ちを禁じ得ませんでした。

帰京数日後、門脇小学校校長先生からの礼状に加え、生徒代表からの絵入り礼状・折鶴が郵送され、学校全体からの感謝の気持ちを大きく受け止め、その気持に感激しているところです。



2011.3.11 東日本大震災を支援しています



南相馬及び浪江町「教育関係充実費」支援報告

松浦 陽子

去る6月14・15日にミカの会の皆様から頂いた「東北関東 大震災支援金」を届けに一泊で南相馬へ行って来ました。

メンバーは南相馬出身の金子さんと浪江町出身のわたし松浦、そして車の運転手を引き受けてくれた森山さんとその友人の中西さん、ミカの会事務局から和田さんの5人です。

当初現地の様子が良く分からず"道路は大丈夫か?ホテルは取れるのか?又、義援金としてお渡しするとそのまま一般の義援金に回されてしまうらしい?"など不安がありましたが、幸いなことに森山さんの娘さんの嫁ぎ先のお舅さん(松本さん)が南相馬市役所の課長さんだったので、事前に森山さんがメールのやりとりで諸事情を詳しく聞いてくれていたので無事ホテルの予約もでき、義援金の問題も松本さんも勿論調べてくれましたが、金子さんが鹿島中学校の校長先生等に電話で相談して「教育関係充実費」という名目にすれば直接学校に届くことが分かり、それらの問題は解決できました。

然しまだ問題があり、私の出身校浪江町の大堀小学校は原発から10km 圏内にある地域で封鎖されていて町には入れませんので、どこで大堀小学校の関係者に会えば良いのかあれこれ考えて不安でしたが、今現在浪江町の仮の役場がある二本松に問い合わせたら、「大堀小学校の校長である遠藤先生が今一時的に相馬市教育総合実践センターに勤務してます。」と教えてもらえたので、早速遠藤先生と連絡を取ったら何と自宅は南相馬の鹿島なので金子さんの出身校に近いことが分かり、松本さんからの情報提供もあり、南相馬の市役所の隣にある文化会館"ゆめはっと"で会うことに決まりました。本当に偶然に南相馬の方だったのには驚きましたが、これで同じ南相馬で一辺に支援金をお渡しできることになりほっとして出発することが出来ました。

首都高が混む前に通過したいと町田を早朝4時半頃に出発して首都高をすいすい抜けて東北道に入り、いよいよ福島県に近付いた頃、息子が用意してくれた「東日本大震災復興支援地図」を見て、郡山~二本松そして川俣~飯館村へ抜けて南相馬へ向かうルートを選択しました。事前に猪苗代のスキー場のロッジに避難している姉から「浪江や南相馬方面は今、通れる道路は一つしかないよ」と聞いていたので・・・。

途中、あのたびたびニュースに取り上げられる飯館村(いいだてむら)を通りましたが、自然に囲まれた牧歌的な美しい村が、今は住民がほとんどいない"死の村"に見えました。

やりきれない思いです。さて5時間半位で南相馬に到着し、 早速文化会館"ゆめはっと"を訪ねました。隣にある南相馬市 役所と比べるとまだ新しくきれいな建物内はすっかり非常体制 で、住民の震災に関する諸問題の相談所となっていました。

自衛隊の人達もつなみの被害にあった海岸方面の復興支援の為か"ゆめはっと"に常駐しているようでした。松本課長さんにもお会いして、この度の南相馬支援に際してのご協力に御礼を申し上げ、南相馬市役所があるこの原町地区の現状などを伺いました。

原町は原発から約25kmの 距離で今5万人の住民が 避難をしていて約2万人が 残っているとのことでした。 松本さん達はその住民のサ ポートに当たっているので 大変な様子でした。

そして約束通り 12 時半に 浪江町の大堀小学校の校長、 遠藤先生とお会いして「教 育関係充実費」20万円をお 渡ししました。子ども達が 今一番必要としている物の 購入費用に使わしてもらい ますと謝意を述べられまし





「浪江町は小・中合わせて9校ありましたが、今は岳・土湯・猪苗代方面にばらばらに避難を余儀なくされているので、二学期までには二本松の東和町下川崎小(廃校になっている)を中心に浪江町の学校を集めようと準備を進めているところです。」と話しておられました。先生も生徒も皆、不自由な生活に耐えているのですね。二学期まで辛いでしょうけど頑張って欲しいです。

そのあと約束の時間より少し早く1時15分頃、"ゆめはっと" から車で10分程度の距離にある、金子さんの出身校である鹿島中学校を訪問しました。まず校長室に案内されて驚いたのはすぐそばのデスクにもう一人校長先生がいたことです。そして良く見ると何と彼は私と大堀小・中学校時代の同級生で、原発から20キロ圏内にある小高中学校の校長先生をしている原中君でした。事情を聞いてみると今この鹿島中学校には5校が一緒になり、混合編成ではなく学校ごとに分かれて、3階の一角はどこの学校、2階の一角はここの学校、又特別教室や廊下までも使用して学校単位で授業を行っているのだそうです。

5 校が同居とはどんなに不自由なことでしょう。さて金子さんから鹿島中の菊地校長先生に「教育関係充実費」をお渡ししました。菊池先生から御礼の言葉と共に「近々、相双地区の中体連があるので試合球などスポーツ用具購入費に当てたい」との説明があり、校内を詳しく案内して頂きました。

原中、菊地校長さん達に見送られ鹿島中を後にして最後の訪問 先である上真野小学校を訪ねました。こちらは 4 校が同居して いてスクールバスで送迎をしているとのことでした。

やはり4校同居なので家庭科室もない状況だそうです。鹿島中も勿論、福島全体に言えることですが、地震、つなみ、放射能に加えて風評被害と4重苦に苦しめられ生徒達のこころのケアが問題視され始めて、上真野小でも東京からスクールカウンセラーに来てもらっているのだそうです。

こちらの学校にも「教育充実費」として 15万円を金子さんから お渡ししました。帰り際ふっと"ネパールの学校支援みたい"と 思わされたことでした。

翌15日、"帰る前につなみ被害にあった海岸の方に行きせめて慰霊をさせてもらいましょう"とお坊さんである森山さんの発案で、原町から近い海岸に向かいました。

自衛隊の力に負うところが多いのでしょうが、瓦礫も割合片付いている方で被害の度合いから言えば石巻や陸前高田などとは比較になりませんが、テトラポットが内陸部に流されていてまるでお墓の様に見えたのが印象的でした。森山さんが海に向かって長いお経を唱えて私達4人も合わせて合掌し、つなみで亡くなられた方々の慰霊をさせて頂きました。

帰り道、猪苗代に避難をしている私の実家の家族と二本松で落合い、町田の友人から預った支援物資を渡したり、同行の方々と一緒にお昼を食べながら避難生活の様子などの諸々を聞いてもらいました。

帰宅してから同行された中西さんが、今回の支援活動について新聞等に投稿してくださり、福島民報に掲載されました。また大堀小学校の遠藤先生と鹿島中学校の菊地先生から御礼状が届き、それぞれ「大変なのはこれからですが以前より家族や地域の絆が強くなった気がします」・「お蔭様で 6/27~6/30 まで行われた福島県中学校体育大会相双地区予選会で 6 競技で県大会への出場権を獲得することが出来ました」と嬉しい報告がありました。

[大倉山スケッチ会ネパールカトマンドゥ展] サブタイトル「まさかが 現実に」 篠原 功

「この作品展を是非ともカトマンドゥで開催することを期待します。」 横浜 (大倉山スケッチ会)・高知 (倫の会)第12回合同水彩画展の、打上げの席上でのラマさんの挨拶に、会員一同戸惑いと歓びの声をあげた。同席のジャンモさんもにこやかに頷いている。

この作品展にはミカの会総会に来日されるラマ氏はたびたび来場しており、2001年ジョムソン~カクベニのスケッチツアーなど多くのメンバーとの交流がある。

カトマンドゥ展企画にあたり、ミカの会理事会に報告承認、 理事長の激励文を得て、展示会の狙いとして作品は日本の四季、 文化とし、現地若者とのスケッチ交流会の実施、病院、学校な どへの作品寄贈など具体的な計画を進めた。

計画はネパールの電力事情の悪い中(停電が当時で10H/日と伺っていた、今はもっと悪くなっていた。)パソコンメールのヤリトリから準備は難攻した。会場の準備・贈呈先・お客様への連絡、ネパール大使館への働きかけ等々やることは山ほどあった。しかしラマ氏と大谷氏の意気込みで準備は進んでいった。

今年 2/1~5 の会期ではあるが「大倉山スケッチ会カトマンドゥ展」が開かれた。

会員25名出展作品47点と学生たちに寄贈する絵の具・スケッチブック等を大谷代表・森本先生・和田さん、篠原の4人で手分けして持ち、成田を1/31に出発した。

シンガポール経由で約12時間のフライトでカトマンドゥに到着、その足で会場Nepal Art Council に直行、大きなバーナーがすでに準備されていてそれを見た時に、ラマ氏の熱意と、この展示会が成功することを強く感じた。

2/1「オープンセレモニー」は約50名の学生含むお客様を前に、ラマ氏の司会で始まった。主催者を代表して大谷さん、シュレスタ観光局長・日本大使館橋本書記官の挨拶の後、同行した森本先生も入ってテープカットを行いスタートした。

カトマンドゥジャーナル紙ら三紙の取材を受け、翌日には二紙に絵写真も掲載され「大倉山カトマンドゥ展」が紹介された。

午後に学生たち約20名とバスに便乗して世界遺産パタン王宮広場へ出かけ「野外スケッチ会」行った。会員から寄贈された絵の道具を配付、森本先生の絵を描きながらのデモストレーションを行い、学生たちと一緒に描いた。アットいう間に人だかりにが出来、我々も照れながら筆を動かしていた。

世界遺産が一望に見えるレストランの3階で、学生たちと片言のネパール語と日本語が入りみだれながらにぎやかに楽しく会食が出来たことも楽しい思い出の一つである。

機上から見たあの大パノラマをもっと近くに見るために、翌日、飛行機でポカラに移動、あいにく着いたときははっきり見えなかったが、翌日早朝まだ暗い中出発、バスで1時間それから寒い中サランコットへ向けて歩いた。「満天の星とはこのことか!!」天の川がはっきりみえ、時々流れ星が走る、展示会が成功することを願ったり、たくさんのお願いしたが叶ってくれるか楽しみである。

寒い星空に中待っていると、あたりが明るくなるにつれ、ダウラギリ・アンナプルナ・マチャプチャレ等の山頂が黄金に輝いてきた。こんなきれいなものを眼前に見た喜び、見たものにしかわからないこの感激をかみしめながら、連なるヒマラヤの山々のすばらしい自然の眺めを感じた。

周りが明るくなると4人とも絵筆が動き出していた。この瞬間を描くためにも来たのだ。夢中で描いたことを思いだす。

その後フライトとバスを乗り継ぎ、今朝見た日の出を、今度 はナガルコットの三ツ星ホテル「クラブ・ヒマラヤ」の屋上か ら、夕日の映えるガネッシュヒマール・ランタンヒマールをみた。 天気に恵まれたことも今回の旅行を成功にしてくれたと、天気 に感謝した。

会期も終わりに、同じ会場で油絵展をやっていた学生たちと 技能交換を行い最後に絵の交換や画材用具をプレゼントをした。

当初はどのくらい来場者が見えるのか不安でしたが、会期中カニヤ女子高校生ら 200 名を含む合計 619 名の来場者が来てくれたことは関係者の喜びであった。

沢山のお客様が来ていただいた「カトマンドゥ展」も最終日になり、出展した会員の絵 37 点をネパールの日本語学校やマズワニ校ほか三校、ラマさんの妹ジャンモさんのお勤め先のルクラの病院など二箇所の病院などに贈呈して閉幕した。

最後の夜は観光局長主催の懇親会に出席、タマン大使から「今年はネパール観光年で、民間ベースでこのような企画で日パ文化交流が行われたことに感謝します。」と御礼の挨拶をいただいた。私たちの展覧会を高く評価して頂き、少しはお役立ちが出来たのではないかと感じた。タマン大使・局長初代日本人学校長らに大谷さん、森本先生から絵のプレゼントを行った。

大変お世話になったラマさんにお別れをしてタラップをあがった我々は、「第一回のカトマンドゥ展」を無事終えた満足な顔であった。



この度は会員の皆様から暖かいお志を頂戴しまして本当に有 難う御座いました。おかげ様で去る6月10日から6月14日 ~15日にそれぞれ石巻の門脇小学校、浪江町の大堀小学校、南 相馬の鹿島中学校、上真野小学校、と合計 70 万円をお渡し出 来ました。厚く御礼申し上げます。

3/19~5/31 支援金総額 873.496 円

宮城県石巻市 門脇小学校 200.000 円 福島県浪江町 大堀小学校 200.000 円 福島県南相馬市 鹿島中学校 150.000 円 福島県南相馬市 上真野小学校 150.000 円

合 計 700.000 円

経費(交通費)

宮城県 新幹線・バス 2名 41.580 円

福島県 レンタカーガソリン、高速代 5名 57.420 円

合 計 99.000円 差引残高 74.496 円

以上です、当初は東日本大震災支援金としては一旦打ち切り にするはずでしたが被災地復興は先が長く継続支援が必要と思 われますので、来年3月10日迄、引き続き支援金を集めさせ て頂く事になりました。

創立 15 周年を迎えます

大谷 安宏

2006 年 8 月 創立 10 周年記念式典は「ぱるる プラザ まちだ」 にて多数の来賓を迎えて執り行われた。10年間の支援状況と 主なイベントの年度毎の映像を係わりの深い会員の年度ごとの 説明は好評を博した楽しい式典であった。

11月、10次ネパール教育支援の旅ではルンビニ地区建設支 援校 11 校生徒 1200 名による当地区初めてのスポーツフェス ティバルを開催、徒競走、球入れ、綱引きに真剣に取り組む生 徒等の姿勢に感動のイベントであった。

あれから早や5年、今年創立15周年を迎える。 「ゆっくりと ささやかに 心を込めて 手から手へ」モットーに ネパールの子ども達への教育支援は助成団体、支援団体及び個 人の支援、各地でのバザー収益などにより 15 校に 51 教室・ 職員室 1 図書室 1 図書館を建設、17 校に延べ 78 回 7300 冊 の図書支援、1150名への制服支援、発電機、計測機器類、実 験器具などの支援に及んでいる。

14次にわたる教育支援の旅参加者は延べ160名にのぼり、 現地の関係者との交流は信頼関係を築き、加えてラマ理事の尽 力によりこれまでの継続した支援活動に繋がり、まさに「継続 は力」であると思う。

7月の理事会にて創立 15周年事業企画検討メンバーに今村 副理事長をリーダーに大谷、加藤、和田、中野、松瀬理事、大 谷が選出され、国内での記念式典、現地でのイベントの企画検 討が進められている。

節目の年を迎え、より有効な支援活動の推進と会員各位の 益々のご活躍を願っています。

厳しい暑さが続いておりますが、節電の夏です。くれぐれも体 調をくずしませんように。今年度は未曾有の大震災により、春 からのイベントが中止になりましたが、これから秋にかけて、 様々なイベントが続きます。少しでも被災された方々の力にな れることを考えながら、進めていけたらと思います。

8月21日(日) 和太鼓コンサート

梁田寺 16 時開場 (焼きそば出店)

9月4日(日) 栄通りフェスタ

町田市役所分室・パンダ駐車場横

10月8・9日(土・日)まちだ大道芸 パークアベニュ野村証券前

10月22・23日(土・日)横浜国際フェスタ 象の鼻パーク

10月30日(日)夢広場

ぽっぽ町田

11月5日(土)相模原国際交流フェスティバル 大野北公民館(淵野辺)

12月17日(土)移動例会

町田市民フォーラム 4 階 活動室 A

8月の例会から開始時間が早くなります。 いままで毎月第3土曜の3時からでしたが、1時30分からになります。



【編集後記】

2011.03.11 突然の揺れを思い出します。私の60年以上の体 験でも最大級の揺れでした。その後の津波は信じられない程の 破壊力で住宅を、原子力発電所を破壊しました。多くの命を奪 いました。テレビの映像を見ていると涙が止まりませんでした。 5ヶ月目を迎え復興が進みますが、放射線の影響は止まる事を 知らずに、食料を始めとして大きな不安を投げかけています。 ミカの会の浄財も被害地に届けられました。

ネパールの皆様からも激励の言葉を頂いております。

「頑張ろう日本」なでしこジャパンに続こう。

亡くなられた被災者の皆様に・・・・ 合掌

S.K